

伝えたのだと思う。このようなノウウハウを親たちから伝えられた世代がそろそろ消えてゆくのかもしいない。

ファミリーの真鶴三羽 目の周り赤くないのが子ども  
もの鶴だ 濱田千春

鶴渡来地として有名な出水。その出水に取材した今日の七首。どれも細部までいねいに表現していて読みごたえがある。この一首も、多くの中から家族らしい三羽を識別、その中で親子を識別するという細かい心の動きが的確に読めて楽しい。

訥々と山中の雪を漕ぎ進む磐越西線、ガラスの曇り

河野千絵

福島県から新潟県へ雪の中を走る磐越西線。なんとなく閉じ込められているような、雪独特の閉塞感をうまく作品化している。「磐越西線」という固有名詞が効果的。

採れ過ぎたレモンを家の前で売る三個百円すこし賑わう 太田裕万

庭にレモンの木があるのだろう。三百個売っても一万円にしかならないわけで、もちろん、もうけがどうというのではなく、小さなお祭りのようなものだろう。第三句「売る」「第五句「賑わう」と共に「う列」の動詞で終わって、軽さが演出されている。

灰色の海へと指を伸ばす子の泣く声 ユージン・スミスの写真に 松本実穂

昨年暮れから今年はじめにかけて、「生誕百年ユージン・スミス展」が東京で開かれた。ユージン・スミスには、太平洋戦争の写真から水俣病の写真まで、私たちが

知っている何枚もの写真がある。ここは水俣の写真。自身も写真を撮る作者ならではの一首。

白さぎの去りたる後のせせらぎの光の中に二匹の緋鯉 白岩裕子

白さぎが居る間は、たぶん緋鯉たちはどこかにかくれていたのだろう。大きな体だから、隠れるのはたいへんだろうが、とにかく見えなかった。その緋鯉があらわれる。「光の中に」が表現上のポイント。スポットライトの中に登場するように緋鯉があらわれたのだ。舞台づくりの見事さ。

地の声を五階まで運びくる風ありてあのひととあのひとのこゑ 勝島靖夫

見てはいないのである。五階の部屋にいて、耳でだけ道路を歩く人の声を聞きわけている。私たちは視覚優先の時代を生きているから、ふだん、聴覚だけで人や出来事を識別することは少ない。あえてそこをクローズアップしてみせた面白さ。

もう居ない少女をずっと待つてゐる人形美術館の  
人形たちは 野原亜莉子

「人形美術館」の人形たちには、かつて持ち主がいた経歴がある人形もたくさんいる。そんな人形たちの心情に光を当てたこの作者ならではの作。佳作と思う。